編集者のための組版講座（第4回）編集から見たワークフローの問題点

前田年昭

二〇二二年一二月七日　読書人

業態の変化は分業を変えた。編集者にとっての組版をめぐる問題は、分担と責任をめぐる混乱でもある。かつての印刷工場は、個々の工程とその担い手が、機械の一つひとつの歯車のように組み合わされた協業だった。印刷・出版が個々人の手に解放されつつある今でも――独り出版社であっても――問題は同じである。誰がどこで決裁するのかを明確にしたチームでなければ、丈夫で読みやすい本（端正な格子、明確な階層）をつくることはできない。

田嶋さんの問題提起

組版ソフトはワープロとは違うものである

田嶋淳さんが書かれた「組版ソフトとワープロは違うものですよという話」〔「電書魂」２０２２年8月19日付、**資料1**参照〕に刮目した。

全文を読んで欲しいが、組版ソフトは「活版印刷の組版工程をデジタル化したもの」であって、「本の紙面を効率的に作成するためのもの」。これに対してワープロは「タイプライター・原稿用紙をデジタル化したもの」であって、「デジタルテキストを入力するための道具」だ〔引用部傍点は引用者〕。これが混同されていることが、「ここ20年近くの印刷組版データ制作現場の苦労の一因」だという指摘である。私は、同意する。

田嶋さんは歴史を振り返り、「活版印刷の時代（その後の電算写植機の時代も）には、本の版面制作は「工場で職人が行うしかない作業」だったものが、ＤＴＰの普及で変わってしまったと指摘している。

ＤＴＰは組版処理に必要な機材コストおよび人的コストを大幅に低減化させた功績がありますが、一方で組版のプロの領域の仕事とそうではない前作業の領域の境目をわかりにくくもしました。その結果何が起きたかというと、本来なら前作業の段階で終わらせておくべき推敲や原稿整理を組版工程に入ってから行う例が後を絶たなくなったわけです。

まったく異議なし、そのとおりである。そして、田嶋さんは、「本の制作で推敲や原稿整理などの「設計」にあたる工程と、そのあとの組版処理、「施工」にあたる部分は分けて考えられるべきもの」だと指摘している。これも、そのとおりである。

活版印刷では、文選工が漢字や仮名の活字をひろい、植字工がこれを版に組み上げた（工程としてはもうひとつ、あと工程として解版がある）。手動写植は、文選と植字をひとりでこなせるようにし、解版をなくした。電算写植もこれを引き継いだ。ここまでは依然としてプロの仕事だった。が、文字入力は、このころから急速に普及したワープロによるテキストデータとなり、素人に解放されていった。また、編集者はこのころから組版の指定をデザイナーに丸投げすることも多くなる。このあたりが、田嶋さんの指摘する、組版ソフトとワープロとの混同の始まりであり、「プロの領域の仕事とそうではない前作業の領域の境目をわかりにくく」した始まりだった。プロでない人びとの入力したテキストは、プロの校正者の目を通すのがよいのだが、これがそのまま、組版の現場に流れ込んだ。かてて加えて、組版の指定（場合によっては施工まで）をするデザイナーは、たとえレイアウトソフトのプロであっても必ずしも組版のプロではなかった（場合も少なくない）。これが、組版現場の混乱、混迷に拍車をかけた。印刷会社は90年代以降、社内から組版を切り捨て（るところが多く）、入稿されたデータをそのまま「刷る」だけになっていった。分業と協業は、助け合いや協力とともに厳しい緊張（ときに対立も）のなかで、互いに無理難題とも思える課題に取り組み、伝統的な読みやすさと創造性を結びつけた組版を生んできた。しかし、何でもひとりでできる（素人にでも、ともみえる）ＤＴＰは、「とりあえずできること」で打ち止めにすることも少なくない、ように思う。こうして、生み出された組版の姿からは、プロの作ってきた「端正な格子」「明確な階層」が弱くなって、今にいたっているのではないか。

本づくりの設計と施工、さらに組版自体の設計と施工を、できれば人的にも分け、責任と権限を明確にし、それぞれの橋渡しに点検（校正）を入れることが必要だと、私は考えている〔**資料2**参照〕。

書き手や編集者は組版者と共通の言葉を使っているか

編集者の使っている言葉は、組版や印刷、製本の人びとと同じ言葉なのだろうか。指定や入稿は、コミュニケーションの始まりである。簡単明瞭な言葉でのやり取りができているだろうか。縦組みの人文書をつくる場合を想定して考えてみよう。

組み方向

書き手や編集者は、パソコンなどのワープロで文を書き、推敲する。たいていは横書きである。これに対して、組版者は、組版ソフトで縦組みの画面を見ながら仕事をする。感覚が違う。一例をあげれば、洋数字と漢数字をめぐる表記問題がある。〝組む〟という行為によってテキストには新たな情報が加わり、横書きで考えていた書き手や編集者の頭脳は、縦組みの姿を見て新たに動き始めるかもしれない。また、和欧混植にともなう欧字横転も、実際の姿をみて改めて違って受けとめることもあるだろう。

「原稿は完成原稿で」という理屈は間違いではないが、組版された姿を見て推敲を重ねることは間違いではないばかりか、大切なことだ。情報の力は〝組む〟ことによって強めることも弱めることもできるわけだから、流し込んでそのままでは決してよい本はできない。流し込みは、仕事のおわりではなく始まりである。原稿整理では組み方向を意識することが大切である。

全角と半角

書き手や編集者が文を書く、文字を打つときに「半角」として意識しているものは半角ではない。和文組版は、正方形の文字を積み重ねた「端正な格子」が土台である。単位は、字幅（字送り方向の文字の寸法）の全角、半角、四分……である。しかし、書き手や編集者が「半角」として意識しているものは、実際は日本語入力をオフにした状態で入力した文字や記号符号なのであり、それぞれのフォントによる固有の字幅を持つ。たとえばスペースは欧文スペースであり、和文組版から見れば、約三分である。

日本語入力オフ↓　日本語入力オン↓
横浜 (Yokohama) と
和モノ　洋モノ ラインが下がっている

大前田英五郎
林光、森毅
←ホントの半角なら揃うはずなのに…
↖半角？↗ 実は欧文スペース

区切り

組版による情報の変化でもっとも大きなものは、区切りである。ページとページ（見開き内、めくった次）、章と節、段落と段落、文と文、文字と文字……、読み手が戸惑い途切れることなく読み進める（連続）ことと、階層の違いがはっきりととらえられる（切断）こととがひとつに統合される、その加減が組版のよしあしを決める。連続を支えるのが「端正な格子」であり、区切りを明確にする「明確な階層」とあわせて、読みやすさをつくりだす。組版ルールの柱は、孤立を防ぐ技術であり、その具体例が、ページ末や行末の禁則である。したがって、たとえば行末禁則対象文字は、本の性格、読者対象、1行の文字数などによって、本ごとに決められ、変わってよい。千篇一律なルールはなく、まして、和文組版の基本の決めごとを指して「弱い禁則」などと名づけるのは不見識きわまりない。

調整

ＤＴＰでは基本設計が確定し、本文を流し込めば、ある程度正確なページ数がつかめる。微調整などによって、めあてのページ数に収めることも可能だ。しかし、調整はあくまで微調整にとどめることである。収めるために、本文文字サイズを13級から12級にするというのは微調整の範囲を超えている。13級の本文と12級の本文とでは、本のイメージ（雑誌では記事のイメージ）がかなり違うからだ。技術的には可能であっても、コピー機でＢ４判をＡ４判に縮小するようには本の基本設計はできない。思い切って基本設計からやり直したほうがよい。

階層と書体

「明確な階層」は文字選びでも明確な判断規準のひとつである。洋数字の書体を選ぶ場合、索引や指示参照のノンブル数字は、各ページのノンブル編集とはに使っている書体と同じものにする。本文の洋数字書体とは区別する。

文字は、抽象的な字体から順に具体的なものに降りていきフォントに行きつく。フォントの字が並んで行をつくり版面をつくって、文字は意味を読み手に届ける。書かれた言葉は、けっして話された言葉の写しなどではない。

組版とは、書かれた言葉の階層を明確にし、論理を整頓して印刷物の版をつくる技芸である。いま問われているのは、編集とは何かということではないだろうか〔**資料3**、**4**参照〕。

参考文献
E・コセリウ『うつりゆくこそことばなれ』田中克彦・かめいたかし共訳、クロノス、１９８１年〔『言語変化という問題』岩波文庫、２０１４年〕
府川充男『組版言論』太田出版、１９９６年
野間秀樹『言語存在論』東京大学出版会、２０１８年

度重なる工程の見直しは組版、校正、印刷、製本といった後工程までを巻き込み、本づくりの行き先を見失わせる。成り行きまかせのページの増減は本そのものを破綻させかねない。「二度手間」はチームの士気をそぎ、ミス発生の原因にもなる。編集者が本作りの総監督なら、工程表が羅針盤、台割はシナリオといえる。

量の割り出し

ページ数はどう割り出すか。持ち込まれたワードのプリント原稿はあくまで参考にすぎない。テキスト文字数をカウント（https://sundryst.com/convenienttool/strcount.html）し、基本設計案のページ当たり文字数で割る。これに見出しや図版などの分を割り増ししたものが概算の基本になる。割り増し分には、表紙、前付（口絵、献辞、序文、凡例、目次）、後付（付録、索引、あとがき、奥付）があり、章起こしスタイルが見開き起こしか片起こしかなどもページ数に影響を与える。

台割

台割は、シナリオである。印刷会社への入稿の際は、台割表も同時に渡す。右綴じの本なら右から左へ、左綴じの本なら左から右へ、レビューシートとして書く。流れを正確につかむためには現実に近づけたほうがよいからだ。視覚単位である見開きごとに、裁ち切り図版の配置もしっかり書き込む。章の起こしを、見開き起こしにするのか片起こしにするのかも、ここで再確認する。初めに考え方をきっちり定めることと、それを途中で組みなおすことは対立ではない。仮台割を改訂しながら決定台割へ仕上げていく。総ページをひと折りのページの整数倍にまとめていく。

新組から初校、再校と進めていく際に、編集者と校正者は、文字があふれた場合の処理（あふれさせておくのか、ページを追加しておさめていくのか）についても確認が必要である。一般的にいえば、広域調整や、例外的な詰め込みなどの処理は、最後の赤字直しの際におこない、はじめの段階ではやらないことである。

工程表

工程表は羅針盤である。その中で、編集、組版、校正等それぞれの工程の責任と権限の境界線を決めておく。例えばデータの保管者は誰か。印刷会社への入稿責任者は誰か、などである。個々の進行に遅れが生じたときの処理で気を付けることは、小刻みに何回も先おくりしないことである。日程の組み替えは、1回かぎりで、これなら大丈夫と確信のもてる時間を相談して思い切って延ばすほうが、お互いの傷は浅く済む。

校正

他者に申し送りする場合だけでなく、自分で直す場合も、赤字校正を必ず記し、残す習慣が大切である。